



『製本技術の 変遷史談』

史談会開催日

昭和 56 年 (1981 年) 4 月 22 日

■ 語る人

牧 経雄 氏

(牧製本印刷 _ 会長)

今回掲載の「製本技術の変遷史談」は、去る 4 月 22 日、東京・千代田区の千代田区立産業会館で行われたものである。牧氏は明治 35 年に生れ、大正 10 年、若くして父業を継ぐため牧製本工場に入り、以来 60 年間にわたって、辞典、全集本、豪華本などの製本技術の改善と合理化を研究し、氏の手にかかった製本は昔から高い評価を受けている。

また、牧氏は多年全日本製本工業組合連合会会長・東京製本健康保険組合理事長等を務め、製本並びに関連機関最高の指導者として活躍、藍綬褒章と勲三等旭日中綬章を受章している。79 歳の現在、千代田区工業団体連合会長、牧製本印刷 _ 会長である。

(1) 道具は鍋、刷毛、手包丁

新兵器は「ひっぱりの断裁機」

“往時渺茫として夢のごとし”と申しますが、昔のことを話せと言われても何か夢のようでございます。

私は明治 35 年に生まれました。丁度この年は兵隊が八甲田山に雪中行軍した年であり、東京専門学校と言われていた早稲田大学が出来た年だそうです。私の父はどちらかというと漢学者の後裔で、一族は聖堂の先生をしていたようです。父のおじいさん（私の大じいさん）の門下には鈴木喜三郎、望月圭介、池田謙蔵などの名士がたくさん出ていますが、父が 13 歳の時、私にとっては大じいさんに

なる方が亡くなったので、その時から父は製本業者になりました。面白いもので、当時私の母方は今でいう町内の“頭”で、め組の喧嘩に行ったというのです。私の中には学者の血と喧嘩好きな江戸っ子の血とがあるようです。ですから、時々紳士になったり時々出鱈目になったりするの、祖先の血のせいと存じます。

明治34年頃、人形町近くでみかん箱をひっくり返して仕事台にした父と母の独立が始まったのです。私の生年月日は、戸籍上は10月29日となっていますが、母に聞くと6月6日だと言うことです。「どうしてそんなに遅れたのか」と聞くと、「忙しくておまえの届けどころじゃなかったよ」との返事でした。昔の人は呑気なことを言っていたものです。貧乏の最中で、親父を助けてなんとかやってきたわけですから、確かに大変だったようです。

お話をするに際して、一応、関東大震災までを一区切りとし、それから終戦までと、そして戦後とに分けて進めて行きたいと思いません。

明治37（西暦1904年）、8年の日露戦争当時は、製本業者にとっては大変不況な時代で不景気のどん底だったようです。そのころ、新富町に新富座という座がございまして、日露戦争直後のため「日本軍大勝利」の芝居が大変入りをよくしたそうで、製本の職人たちはアルバイトで1日は日本の兵隊、1日は支那の兵隊の役をしたそうです。日本の兵隊になったときは相手方を打つことが出来るが、支那の兵隊になったときは必ず負けなければならない、というルールだったので、皆日本の兵隊になりたがって大変だったそうです。それでも60銭ぐらいもらえるので良いアルバイトだったそうです。

私の父は、東京製本同業組合を作った岡上儀正という方のところに勤めておりました。岡上さんは2代目ですぐ潰れてしまいましたが、その頃大根河岸の近所にあり、丸善の仕事をしていました。丸善というのは、印刷・製本を語るとき必ず出てくる非常に古い歴史あるお店です。父は岡上さんで製本の修業をいたしました。

製本・印刷の発達は多く築地を中心としたようです。築地地区に外人の居留地があった関係かもしれませんが、築地を中心として、そこから東京を西北へ向かって京橋、日本橋、日比谷、神田、小石川へと発達したようです。父の御主人の岡上さんも京橋で、大根河岸の近くにありました。築地活版だとか中屋、秀英舎（後の大日本印刷）、細川活版所、一色活版、三秀舎、共同印刷と、西北へ西北へ



と流れていました。

この頃、蕎麦が2銭5厘くらいでした。製本屋でも断裁のある家は少なく、夜逃げなどは簡単に出来ましたそうで、機械がありませんから、家だけ越せば夜逃げが出来たのです。古い親方は、苦しい時は夜逃げが上手かったようです。後から大家のところへ謝りに行った、などという話はよく聞きました。

当時の製本は全く原始的で、膠鍋があればいい、刷毛があればいい、手包丁があればいい——今で言う小道具だけあれば用が足りた時代で、普通の製本には事欠かない次第でした。

製本業者の位置は非常に低く、お得意に出入りすると名入りの半纏をもらいました。半纏をもらうことが取引の許可になっていました。ですから方々の半纏をいただきました。職人的で良いようでもあり、悪いようでもありました。

すべて手作業ですから非常に時間もかかります。針金綴も手でした。この頃(明治40年)の新兵器と言うと「ひっぱり断裁機」(明治38年頃輸入されたと言われています)とあって、ワンサイドで引っ張れば切れる、という断裁機がありました。これなどは新兵器中の新兵器でした。明治30年頃に四方田という鉄工所が初めて断裁を作ったことがあります。これについては明治40年に博文館(今の共同)の大橋新太郎さんが動力の断裁機、針金綴機を海外から持ち帰られた。それ以前に断裁機とはどんなものであるかを聞いていたので作られたのだと思います。これは、ある意味では文献などによるものです。私の覚えているのは明治44、5年以降、10歳ぐらいからです。それ以前となると文献によるものです。

手引の断裁が初めて日本に入ったのが明治37年と書かれています。ケトバシの針金綴を日本で初めて使ったのはやはりその後で、大橋さんが導入なさったことが日本に大きな影響を与えました。

鎌倉町に四方田という機械屋がありました。ここは早くから製本の機械を扱っており、今の芳野機械(先代芳野勇吉氏)は四方田の弟子です。齊藤鉄工所が44年の創業だそうで、断裁機を作り、方々の製本屋へ月賦で入れていました。月島に筑間という断裁屋がありました。この人はなかなか豪傑な人で、銀行の小切手等は裏から書いて発行したので、銀行はどうしても番号が合わないのとおかしいと筑間さんを訪ね「どのようにお書きになっていますか」と聞くと



「裏から全部書いた」と、今では考えられないようなことが行われていました。最もだと思えます。この頃業界で小学校を卒業した人はごくいいほうで、多くは小学校中途でしたから。そして、寝るのは畳ではなく板の間、仕事が終わると片付けてそこへ寝たのですから、今から思うと随分ひどい生活だったと思えます。しかし、それが平気で通っておりまして。蕎麦やうどんが2銭5厘の時代でした。よくゲタが減るといので、ゲタの裏に釘を打って履いたのを覚えております。そうでないとおふくろからすぐに「ゲタが減るゲタが減る」と怒られたものです——。

今の神田の司町は当時三河町と言いまして、スラム街でした。昔一心太助がいたということで有名でした。製本の内職の盛んなところで、製本の手折や手綴をしてくれる家庭が多かったところでもありました。当時の九段坂は現在よりずっと急でして、九段坂の登り降りに手車の後押しをいたしました「たちんぼ」は、三河町の住人が多かったようです。4畳半に2組ぐらいの夫婦が住んでいて、いろんな事件が起こったり、憂愁な話のあるところでした。

明治45年に明治天皇がご病気でお隠れになりました。宮城広場へ行きますと、一般市民が手をついて天皇の平癒を祈るといふ、真剣な国民の願いをまざまざと見たことを思い出します。この頃の世想で天皇陛下は神様でございました。

私がやっと物心着いた10歳ぐらいからのこと、親父が30を少し過ぎ、そろそろ組合へも顔を出すという頃、貧乏の製本屋というのは面白いもので、大晦日にはわざわざ百円札で勘定をもらってきまして、当時百円というのは大変な額ですから、2円や3円の勘定の人はお釣を持っていません。大晦日に掛取りが来ると、御袋が百円札を出します。「お釣がありません」「じゃ、後でまた来てね」と言うのでそのまま帰ってしまいます。この撃退法が非常に功を奏しまして、ほとんど謝まらずに支払いを延ばしましたが、明け方に本当に釣を持って来た人があって、その時は全部取られてしまったそうです。百円の効果は2～3年しか続かなかったようでした。そうした中に、当時の製本屋のお上さんがどんなに苦労だったかがわかります。

私が11ぐらいの時、天長節の前日には、私どもが明日着替えて行く着物を質出しに、御袋は私を連れて行きました。御袋は弟を産む直前で重い物を持ってないので私が持って帰り、学校の式が終わるとまた持って行って質屋へ入れます。私は11にしてすでに質屋の



体験を持っているわけです。その頃の質屋の息子はやはり威張っておりまして。学校へ行きますと、私は経雄ですから「経ちゃん、おまえのところの家賃がまだたまっているから、早く持って来るように、帰ってそう言ってくれ」などと言われます。これを家へ帰って伝えると、親父が「教育の場で家賃を催促するとは不届きだ」と大変なお怒り様でした。親父は儒者育ちですからそういう感覚でしょうが、普通から言えば当たり前のことでしょう。

神保院という御医者で、後に院長になられた鈴木又七さんという同級生の家へ行きますと、御三時に牛乳が出ます。私らは牛乳なんて飲んだことがありませんで、3時に牛乳が飲めるなんていいなと思ってましたが、だんだん大きくなって牛乳が安く買えるとなると、そううまいものでもありません。そうして育ってまいりました。

製本の発達というのは、書店の発達に随分影響を受けました。丸善さんが明治2年に出来たそうです。丸善さんに伺ってみますと、3年に日本橋へ来て、27年に本当に丸善として銀座に看板を出したそうです。博文館さんが20年の6月に出来て、三省堂さんが14年に古本屋として出来ました。大正2年には神田の大火がありました。今の三崎町の結核療養所の近くから錦町3丁目の浜田文房具さん(現存)まで全部焼けました。大きな火事でした。岩波書店さんが、この大火のあった年に古本屋さんとして出発しました。主婦の友さんが大正5年、同文館さんから出た方です。婦女界さんもそうです。主婦の友さんは今でも隆盛ですが、婦女界さんはすっかり影を潜めてしまいました。両者とも大正10年頃すでに25万部を発売されました。主婦の友さんなどは創業当時は大分困って私の親父たちと手形の交換をしたことがあるそうです。

大正3年には第一次世界大戦が起りましたが、この頃は他国の戦争でしたので、日本の製本業界は不況ではありませんでした。大正7年に世界大戦が終わりました。これと同時に物価が急に上がり、大正9年には戦後の大暴落となりました。恐慌となり、銀行も潰れたりしました。私どもなどは貯金が全々ありませんでしたから悠悠としていましたが、お金のあった方は大変困ったようでした。

製本界は相変わらず手仕事で行ってました。先に述べた婦女界と主婦の友や講談社等の雑誌が多量に売れたということは、雑誌がマスプロ化したということで、この頃には、針金綴は“蹴飛ばし”と言って、足で軽く押すとパチッと綴じられる機械を使いました。そうして10万、20万冊の雑誌が製本されたのであります。



共に隆盛だった2社のうち、どうして婦女界が衰微してしまったのかと言いますと——この編集長の女性が社長と特別の関係にあったので、ある日、この婦人が事務所の中で社長を引っ掻いてしまいました。事務所内ということでこれを怒って、止むなく首にしたのです。そこで婦人は筆の立つ人ですから「世をあざむく人々」と題して、社長の一切を新聞に掲載してしまいました。これが基で、婦女界はいつとはなしに衰微してしまいました。戦後までは駿ヶ台の小川小学校の前にありましたが、今はあまり盛んでないようです。

(2) 関東大震災がきっかけに

焼けた機械再生で“かがり機”製造

大正10年、業界の先覚者として有名な山県純次さんが洋行なさいました。これは業界初のことで、なぜ洋行出来たかという点、山県さんは千葉の大滝の庄屋に生まれましたが、純次さんが生れるとすぐ、お母さんがいなくなってしまう、純次さんは3歳のときから親のない子として育てられ、若くして製本業に入りました。大正の初期に山県さんは、生みの母をついに捜し出しました。このお母さんの生んだ子どもが山田菊尾さんといって帝劇第一期の女優で、この方が有名な作曲家・山田耕作さんの奥さんでありました。いわば腹違いの妹なので、そのような家系から山田耕作さんと山県さんはお付き合いをするようになりました。山田さんは世界各国を回った語学のベテランです。そこで山県さんが考えたのは、山田さんを連れて世界を回れば困らないということです。山県さんは非常に裕福な製本業者でしたので、半年がかりで、私の父たちに後を頼み山田さんと外遊いたしました。アメリカとヨーロッパへ行き、今の東ドイツのブレーマーという会社で綴機機をご覧になってきました。「これは使える」と意を強くして帰ってまいりました。当時、製本はまだまだ手で綴じておりました。1折ずつかがっていた時代ですから、山県さんがブレーマー綴機機を見つけてきたということは、特筆大書すべきご功労です。今日の製本界の基を作ったのは山県さんであり、偉大な方です。機械の輸入は、レイボルト商会を使ったのでした。

大正12年に関東大震災が起り、その少し前に丸ビルが出来ました。この大震災は、ご承知のように東京をすべてなめつくしました。死者が9万余人、行方不明が4万余人以上と、10何万の人が失わ



れました。当時の状況は全く悲惨なものでした。東京会館が2階で折れました。鉄筋とは決して上から折れるものではなく、上がしっかりしていて1階と2階の境目が折れるんだということを知りました。

山県さんは11年にかがり機械を持って帰りました。1台、私どもでも分けてもらいましたし、山県さんもお使いになりました。

「良かろう」ということで、大正12年、レイボルトに頼み30台ばかり横浜に着荷いたしました。ところがこの時、横浜の税関も燃えておりました。それで、その機械も燃えてしまいましたし、東京にあった機械もすべて燃えてしまいました。日本人というのは器用ですから、どうしてもかがり機がほしいので燃えた機械をレンガでこすったり磨いたりして、とにかく使えるように直してしまったのです。これが、あとでレイボルトが大変困った問題となりました。当時は、外国の機械ですからパテントは取ってありましたが、真似されないようにしてたわけです。ところが焼けた機械を直して使ったのはパテント侵害にならないで、新しく機械を作ったことになるようで、特許の効力がなくなりました。これで日本でかがり機がたくさん出来るようになりました。

当時のかがり機は、日本では非常に重要な製本の新兵器でした。手でかがっていたのではいくらも出来ないのが、かがり機によって大変な変化を起こしました。これが震災直後における製本界の変遷でございました。

私の得意先のある本屋さんが六法全書を出した時のことです。製本代金は1冊7銭で引き受けまして、納めを終えて勘定を取りに行ったところ、旦那がその日の新聞を見て、「昨日まで1石14円50銭だった米が14円に下がった。米相場が50銭下がったのだから、おまえと約束した六法全書も7銭を6銭5厘にしろ」と言われまして、随分突飛な話だなと思いました。その方は名古屋の出身で、東京で独立したときには、家ではお茶は使わず、お客さんにも白湯しか出さない人でした。私もその頃生意気でしたから、「商売というのは双務的なもので、旦那さんが7銭と言ひ、私も7銭ということで引き受けたのですから、6銭5厘に引くというのは道義に反している」と申しますと、「生意気である。7銭ほしいなら出入りを止める」ということで、7銭いただきましたけど出入りが止まりました。そのころの5厘というのは大切でした。中田さんという箱屋さんは、そこへお歳暮を持って行くのを忘れました。すると「お歳暮が来な



いとほしからん」ということで、お歳暮代として2円50銭引かれてしまいました。私は、見返し用白紙のワンプを持っていかなかったからとワンプ代50銭を引かれたり、帳面は赤字だらけになってしまいました。

出入が止まってから半年程経ちますと、「ぜひ来てくれ」との使いがまいりました。伺いますと、このお方は返品の本をこわしてボールを取って他に使われておりましたが、毎日の本をこわす部数を調べていられたので、毎日3,000冊程こわしておりましたが、ある日、1,500冊しかこわせないで「どうして少ないのか」とお怒りになりました。お店の方が牧の製本は堅牢で半分しかこわせませんと言いますので、「すぐ牧を呼べ」とのことで再びお出入りをいたしました。どうしてこう人をいじめるのかと思いましたが、その方は終戦の時に亡くなりましたが、その遺書の中で「自分は一生を自分だけ良ければ良いと思って過ごした結果がこの寂しさである」とおっしゃってました。

当時、主婦の友さんが50銭の定価で雑誌を出してましたが、この時の製造原価は、営業費までを入れて12銭だったそうです。コンサイズは2円80銭で売られていましたが、これは、営業費から何からすべて含めて78銭で出来てしまったそうですから、その頃、本屋さんというのはえらく儲かったわけです。その時に本屋になればいいのですが、そんな勇気もなく、製本屋で終わることになるわけです。

私どもにとって、一番特筆大書すべきことは、大正15年に改造社が『日本文学全集』を出したことです。これは1円本で、大変な売れ方で80万から100万部ぐらいにも達し、とても製本が間に合いません。困り果てた人がいろいろ考えて、今の無線と同じように背中へのこぎりで目を入れ、それへ膠を入れて製本しましたが、その頃の無線は完全ではありませんから、すぐバラバラになって大変な問題になったことがあります。この円本の出現は大変な勢いで広がり、各社が皆円本を手掛けました。しかし、円本の結果はどれもあまり芳しくありませんでした。

この大正15年12月25日に大正天皇がお隠れになり、一番損をしたり大騒ぎをしたのがカレンダー屋で、日記やカレンダーが駄目になってしまい、大変な騒ぎをしました。また、この頃の逸話によくありますが、ある時大正天皇の肖像を刷ったところ、どう間違えたか大正の大的字の上に点を打ってしまい“犬正天皇の像”という



のを作ってしまって、これが暴力団に見つかりまして大変な目にあっ
たという話や、昭和10年（1935年）にペルシャがイランに変わ
りました。この時も三省堂で地図を作りましたが、ペルシャと入れて
しまいました。ところが「今度国名が変わった」ということで『イ
ラン』と書いて校了に出したところ、『イラン』と書いてあったから
『いない』と思って全部消してしまったと言うんですね。えらい問
題になって、校正の難しさを強く感じました。

円本が出来てから、大量の注文が製本界に流れますので、製本業
者としてはその時に出来る限りの知恵を絞り、本を作ることに精進
しましたから、ただ今の製本は昔からの職人が、これでもか、これ
でもか、と知恵を一杯に働かせた結果です。いろいろな点でそうい
うことが言えると思います。

大正15年と言いますと、第2回のオリンピックがあった年で、
人見絹枝が個人優勝した年です。昭和5年には米騒動があったり、
11月には浜口首相が東京駅頭で重傷を負った年。7年には上海時変
の勃発、16年が第二次大戦の宣戦布告です。昭和13年から終戦ま
で機械の製造は中止されました。

1760年というと随分古い話で、日本でいうと桃園天皇の法歴10
年に当たりますが、英国に産業革命が起こりました。産業革命とは
手工業から機械化へ移ろうという掛け声で、これが1830年まで続
き、この間に世界ではいろいろな物が発明されています。一番顕著
なのが、さらに遡って1436年のグーテンベルグによる活字の鋳造
です。日本でいうと後花園天皇の時代です。グーテンベルグの偉大
なのは、“動かすことの出来る活字”を発明したことです。それま
では、「建築が普遍的な世界文字」であり、15世紀に至るまで「人類
の包括的な記録」でありました。いわゆる建築というものが、文字
でもあり記録でもあると言っています。「印刷の発明は、歴史上の最
大の事件である。すべての革命の母である。根本的な人間の表現手
段の核心である」こう言われています。

1789年から1799年にかけてフランス革命が起こるわけですが、
ここでギロチンが使われました。ギロチンは引っ張り断裁機と同じ
ですが、ギロチンとは人の名前、それも医者で、ギロチンとい
う名の医者を作ったそうです。これは日本で言うと、徳川家斉の
時代です。アメリカが出来たのが1783年で、フランス革命の少し
前です。



断裁機ですが、1300年にはもう発明した人がありました。どんな物かという、本を集めておいて刃物で横に切る機械です。

今から160年程前の1822年に、イギリスで製本用のクロスが出来ました。このことが本を大変進歩させました。ナポレオンが戦いに破れたすぐ後です。ナポレオンがセント・ヘレナ島に流されたのは1814年で、日本では伊能忠敬が日本中を歩いて日本の地図を書いた年だそうです。日本では、11代徳川家斉の時代でイギリスの船が時々浦賀に入ってきておりました。

1844年、ケラーという人が木からパルプを作りました。

1848年には本木昌造さんがオランダから活字を手に入れました。

(3) 28年に初めて欧州へ

ドイツで知った黄金分割の活用

1893年にはアメリカで表紙貼機が出来ました。

1897年、四方田という機械業者が断裁機を作りました。

1900年には、コルブスが自動バックキングを作ったといわれています。

大正12年から昭和20年の終戦までの間に出来た機械といえば、半自動のバックキング、高速度の一方切りの断裁、一コマ締め機、半自動の丸み出し機、大きな丸い台を回して丁合を取るラウンドギャザラー、本に色を付けるエアブラシぐらいのものでした。

本の丸みを出すのに、日本では摘み方を7対3にとか4対6に摘まめと言いますが、ドイツはさすがに機械の国で“4分の3”とキチッと一定して教えています。だから必ず4分の3を摘まねばなりません。丸くしたものをコツでこするのが日本のやり方。外国では斜めにしたものに片方ずつ圧をかけます。外国で半自動が出来たといってもそれは押す機械でありまして、決して全部出来るわけではありません。

本の丸みというのは、製本業者にとっては非常に大事なところで、



丸みは10年たたないと立派に出せないとやかましく言われるほどです。戦後は丸みの出し方も変わってきました。

断裁の刃ですが、刃の角度が切る物によって違います。ビニールを切る時には鋭角にははいけません。断裁の方法ですが、紙を切る時には必ず圧がかかります。この時、断裁の刃というのは圧が強ければ強いほど断裁の刃は外に向かってぞべります。弱いと中の物を引っ張り出してしまう性質があります。このようなことを化学的に教えたのがドイツであります。

これがミュンヘンにあるマイスターシューレという学校の宿題に出ました。ドイツでは、製紙会社が、この紙はオフセット向き、これは活版向き、これはグラビア向き——と紙の適正を明記しています。日本ではそういった明記はなく、そのデータを知ろうとすると、そこは立入禁止ですなどとなかなか中へ入れません。

また、断裁の刃が降りる時、どんな角度が一番切れるか——普通に考えて45度が一番切れそうですが、速度との関係等もあり、高等数学的でもあります。

私どもの商売には、紙を貼る場合があります。では、どんな時に良く着くのか、この研究が盛んに行われました。膠を塗って、これが大気に触れてチョット乾燥し始めたときに初めて粘度が出来ます。粘度が出た時が接着の一番重要な点です。量を多くすれば良いかという、多くなると層をなすからぐずぐずに、反対に少なくすればかすれてしまいます。この接着限度を見つけることこそ技術者なんだと言われました。

日本では早くから無線でも行ってました。どんなやり方かという私どもでは地図だけでしたが、地図は必ず2つ折ですからこれを繰り出し、薄い糊を引いてすぐ、サッと揃えます。すると間に糊が入ります。これを外国ではエラーマンという人が機械的にやっていました。私は、エラーマンが同じことをやっているのを見て驚きました。

教科書がバラバラになってしまったというのは、切り口にただ接着剤を塗って作る無線の方法でした。包丁が切れないと、紙は真直ぐに切れないでおじぎをして切れ、そこへ接着剤を入れてもバラバラになってしまいます。それから考えたのが、ダイヤモンドを付けてガラガラ削り、そこへ接着剤を付ける、今の電話帳がこのやり方



です。このような変化が戦後始まりました。

昭和40年に、中小企業近代化促進法に乗りました理由は「製本界をこのままにしておけば、製本業は必ず印刷業者に設備されてしまう。そうならないためには近代化をすべきである」というのが狙いでした。今に至っては過剰となり、しかも出版社が少なくなり出版物も減ったということで、良かったのか悪かったのかわかりませんが、そのような意向で進んできました。

パピルスで紙が出来た、と言いますが、そのパピルスについて調べてみました。これはエジプトのナイル川で出来ました。ではエジプトとはどんな国かと言いますと、アフリカの東北の隅にある共和国で、約5千年前建国、古代文明の発生地、13世紀以後のイスラム文化の中心地であります。1882年(明治15年)以後はイギリスの軍事占領下にありました。1922年(大正12年)に立憲王国となりました。1952年(昭和27年)革命の結果共和国となりました。1958(昭和33年)にはシリアとアラブの連合共和国を結成しました。1961年(昭和36年)にはシリアを離脱して、1971年(昭和46年)にエジプトアラブ共和国となりました。ここでパピルスが出来ました。パピルスというのは、繊維を並べて、本の初めとか巻き物にして、それに字を書いた、ということです。

私が戦後初めて欧州へ行きましたのは昭和28年ですが、当時はまだ外貨が乏しくて、海外へ出るには渡航審議会という関門がありました。ここへ届け出ると査門をします。まず最初、私は「君のような小企業が行って何になる？」と言われました。「小企業だからこそ、行かせて下さい」と答えると、「だって君、本なんて針金で綴じときゃいいじゃないか」と言われました。そんなことをさんざん問答し、私もあんまり癪にさわりましたから「そんなことをおっしゃいますが、天皇の本も皆私が作ってるんですよ」、「あなた方、六法全書を週刊誌でおやりになったらいかがですか」と応酬すると、だんだん打ち解けてきて「行ってもよろしい」ということになりました。その時、34人試験を受け、通ったのは私一人でした。

その頃はまだ外国へ行く人はほとんどなく、私も全く知り合いもなしにいきなり行きましたから、随分苦労しました。

まず、ホテルで風呂に入ろうと思いましたが、タオルが3種類の大きさがあり、どれを使ってよいかわからない。そこで自分で持っていったタオルを使いましたが、頭を洗い、乾いたタオルがいいだ

ろうと大きなタオルを使いました。ところがそれがバスマットだった、などということがありました。

日本人はほとんどいませんでしたが、1人の大学の先生と知り合いました。大学の先生ですから読む分には困らないけれども、ヒアリングが出来ないで神経衰弱になってしまいました。それでは私の部屋へいらっしやいと、一晩いろいろ話しましたら元気になりました。そのはずで、私のやり方は無茶苦茶で、金を払うのにも自分で勘定をせず手のひらにパッと出して取ってもらうという方法でしたから。よく聞いてみると、ヒアリングが出来ないでレポートが書けないと言うわけです。なるほどこの先生と外を歩いて「床屋へ行きたい」と言うのですが通じません。私はジェスチャーで「コレコレ」とやると一度でわかってしまうわけです。

ニューヨークのホテルのエレベーターのこと、1階の11号で、ワン・イレブンと覚えてたのですが、多勢いる中で「どちらですか」と聞かれて忘れてしまい、とっさに「ワンワンワン」と答えてしまいました。1階で降ろしてくれましたが、次の日から私は「ミスター・ワンワンワン」です。会うたびにそう呼ばれてしまいました。

ドイツについては詳しく調べてまいりました。その推移について少し話しますと、日本に一番係わりの深かったシェルダンという会社は、今はハリスというオフセット会社に吸収されてしまいました。100年以上続いた鉄砲屋であり、無線機を作っているマルティニは、ハンス・ミュラーに買収されてしまいました。デキスターはミーレーグループと一緒にされてしまいました。「産業の歴史は長くても企業の歴史は短い」と言われますが、外国でもなかなか100年続いておりません。変遷が多く昔の機械屋が皆変わっております。

ドイツで面白いと思ったのは、黄金分割の活用です。サイズについて、我々は四六判ですとか菊判、A判、B判などを使っていますが、この比がすべて黄金分割であるということです。1対1.61という比です。例えば、これに4をかけてみると4対6.4となり、四六判になります。いろいろ変化はありますが、この黄金分割から来た比率をどこまでも守っています。私たちはこれを知らないで、見た目が良いということで計算しておりましたが、これが黄金分割になっていると言うことを28年前に知りました。

昭和20年（1945年）以降は、コルプス、スマイス、ポーレンベルグ、スタール、デキスター等のメーカーが、各々特徴ある機械で



近代化したことは、ご承知の通りでございます。

私どもの業界でも、ドイツのミュンヘンにあるマイスターシューレを見て、訓練所等を作っておりますが、期間が短いのと設備が全部ないということから、なかなか完全な教育が出来ません。日本からドイツへ行き、3年間マイスターシューレへ通うのもなかなか困難です。私どもの佐々木（牧製本印刷社長）の息子がドイツへ行き、日本で第1番のマイスターシューレを取ってききましたが、大変辛かったということです。本を作るまで1から始めて、皮すきから何からすべてやったそうです。日本にはこのような学校がないのは残念です。

